

手術せずに腰痛を治すAKA療法を推進



●「先生じゃ治らない」の一言で新治療法を模索

望クリニック

整形外科

住田 憲是 主任医師

整形外科的痛みの90%は関節機能異常で起こる

腰痛は人間が二本の足で歩き始めた、いわゆる進化が生み出したものだから……、という医者は多い。が、それは腰痛は「治らない」と言っているのと、ほぼ同じである。

治らないなら、そのままにしておけばいいのに、整形外科では手術をして、時には逆に悪くなってしまっているケースも多い。

そんな状況があるから、患者は東に腰痛の名医がいると聞くと東へ、西に名医がいると

聞くと西へ。

その東奔西走に終止符を打つ療法が、着実に注目を集めてきている。従来の整形外科の理論とは大きく異なる「AKA（関節運動学的アプローチ）療法」。日本的に言えば「関節運動学的アプローチによる腰痛治療法」ということになるだろう。

アメリカのM・A・マッコネル博士が一九七〇年代に唱えた関節運動学を基礎にして、日本のリハビリテーション専門医の博田節夫院長（博田理学診療科 大阪府河内長野市）が開発した手技療法である。

東京でAKA療法を推進しているのが望クリニック（東京・豊島区）整形外科の住田憲是主任医師。大病院で「手術以外に方法はない」といわれた腰痛患者が、数多く救われている。

CT、MRIと検査技術は進み、骨や椎間板の異常が、これまでの何倍も確実に発見できるようになった。

痛みがひどいケースでは、MRIに写った椎間板の異常箇所が、当然、痛みの発生場所と考えられ、結局、手術となる。

しかし、椎間板ヘルニアで手術を勧められたケースで、本当に手術が必要なケースはわずか10%前後に過ぎないのです。残りの人々は、手術をしても痛みが取り切れず、その後

に治しくくなってしまいます」

と、住田主任医師は言う。

住田主任医師は厚生省に「AKAによる腰椎椎間板ヘルニアと診断された症例の診断と治療に関する研究」と題した報告書を、提出している。

それによると、MRI等を用い腰椎椎間板ヘルニアと診断された患者四六人をAKAを用いて診断・治療を行ったところ、四六人中、本当に神経が傷害されて手術が必要な人は、わずか三人に過ぎなかった。残り四三人は、仙腸関節機能異常が一六人、仙腸関節炎が二四人、仙腸関節炎に反射性交感神経性ジストロフィーを合併した人が三人だった。

患者の93・5%が手術不要だったのだから、なんとも驚きである。

人体には二〇〇個を超える関節があり、それらは関節内で、滑り、回転、回旋という三つの運動が組み合わされたさまざまな動きに対応している。

だが、何かの原因で三つの運動がうまくいかななくなることがある。それが関節機能異常である。

「整形外科的な痛みの多くの原因が関節機能異常か、それをもとにした関節炎です。約90%といっても過言ではありません。そして、最も多くの部位の痛みと関係するのが仙腸関

節です」

お尻の仙骨から蝶ちようの羽のように広がった腸骨とを結びつけているのが仙腸関節である。

中腰などの姿勢をとったりすると、関節機能異常が起きてしまう。腰痛といったその部分のみの痛みではなく、遠く離れた部位にまで痛みは発生する。

「肩にも、老化の見られる膝にも痛みが走ります」

こういった場合、2〜3ミリの「遊び」のある仙腸関節を正常に動くようにするのがAKA療法である。手治療法なので、その技術に大きな差が生じる。それだけに、技術を修得した整形外科医が増えないことには患者は減少しない。

今、住田主任医師が中心となって、AKA療法を行う医師を育成している。

患者の一言が「痛みの治療革命」の起爆剤となった

この療法に出会うまでには、とにかく悩みの連続だった。

住田主任医師は昭和二十二年、愛知県に生まれた。家業が薬局とあって、岐阜薬科大学に進み薬剤師に。

「痛みに興味を持っていましたが、薬で痛みを取るのには限界があると感じ、医師になろうと思ったのです」

昭和五〇年、東邦大学医学部を卒業し、整形外科医局に入局。東邦大学大森病院、同大橋病院、大和市立病院を経て、昭和五七年、整形外科医局を開業。

「医局員時代には、入院患者さんをどのように治療していくかを話すカンファレンスを行います。自分が受け持っている患者さんのケースを出して、先輩方に相談に乗ってもらいます。そこへ、先輩の一人が激的な痛みを訴える腰痛症の患者さんのケースを出したんです。神経学的検査でもレントゲンでも全く異常がないのに、痛みはすごい。

それで困って出したんですが、先輩諸氏から、何のアドバイスも得られないどころか、検査に異常のない者をなぜ出したのかと、かえって叱られてしまった。そのとき、レントゲンや神経学的検査に変化のない痛みはアドバイスできない。これが現実なんだなあ、と思っただけです。それが引き金になって開業したんです」

整形外科の領域は広い、そして、治療に時間がかかる。住田主任医師も骨折から慢性関節リウマチまで、さまざまな患者さんを診た。が、時間がかかるというのは、それだけ患者さんの症状を治せないということでもある。

そんな開業したての、ある小春日和の日。

小林トキさん（仮名、六五歳）が膝の痛みを訴えて、住田主任医師を訪ねてきた。膝が痛い以外は、本当に元気で口も達者。住田主任医師は〈変形性膝関節症〉と診断。変形性

膝関節症は「膝関節の軟骨がすり減り、骨同士がすれ合うために痛みが出る病気」である。レントゲンにはっきりとそれが写っていた。

手術で膝関節を金属製の人工関節に換える方法もあるが、それは最後の手段。それまでは、痛み止め薬を使ったり、膝関節を電気で温めたり、患部にステロイド剤を打って炎症を抑えたりした。

「二三日はよくなりますが、すぐに元に戻ってしまいます」

それでも、小林さんは一年間、住田主任医師のもとに通ったが、結局、「もういいですよ」という前に、小林さんは通院しなくなってしまった。

それから数カ月後、診療を終えて、夜、帰宅しようとして道を歩いていると、住田主任医師は、小林さんとバッタリ出会った。足の引きずりが大分取れているようだ。

「おばあちゃん。膝、大分よくなったみたいだね」と住田主任医師は声をかけた。

「あつ、先生。整体とかいうのを受けてるんですよ。大分いいよ。先生のところじゃよくなかったけどね。ハハハ……」

相変わらず口の達者な小林さんだ。

「しかし、あの一言にはショックを受けました。いつもそれで悩んでいましたが、面と向

以来、何とかいい治療法は……と、悩み続け、昭和六一年、AKA療法と出会い、博田節夫院長の指導を受け、AKA療法実践者の一人として歩み始めた。
「まさに痛みの治療革命です。それに合わせたのも、正直に治らないと言ってくれた患者さんのおかげと思っています」

たった二回のAKA療法で積年の腰痛が治った不思議

平成七年三月。腰痛を訴える遠井啓さん（仮名、三八歳）が望クリニックの門をくぐった。

住田主任医師は、遠井さんが持参したレントゲン写真を見て驚いた。腰の骨がボルトで固定されているのである。

「大手術をしましたね。どこで？」

住田主任医師が聞くと、遠井さんは、中部地方の有名な病院名をあげた。そして、続けた。

「腰椎の第4と第5の間にヘルニアが出ていたので、手術することになったんです。加えて、椎間板も弱くなっているのでボルトで固定しないと、腰痛は治らないといわれました」

た」

「しかし、腰痛は治らなかった」

「はい、そうです」

力なくうなずく遠井さんには、多少、ノイローゼ気味のところも見受けられた。

「あれだけの大手術を受けて、腰痛が治らないどころか、逆に前よりひどくなったのは、誰だってノイローゼにもなりますよ」

住田主任医師は、遠井さんを問診していて、仙腸関節の機能異常だと確信した。

それは、従来の整形外科で「腰椎椎間板ヘルニア」と診断された患者の約93・5%は、仙腸関節機能異常、仙腸関節炎、仙腸関節炎に反射性交感神経性ジストロフィーを合併したケースというデータが出ていたからである。

「まず、仙腸関節機能異常です。大丈夫です。二〜三回治療を続ければ、良くなります」
住田主任医師の言葉に、遠井さんは勇気づけられたようで、うつろな顔に、多少生気がよみがえってきた。

住田主任医師にうながされ、遠井さんは治療用の寝台に横たわった。

「痛いときは『痛い』と言ってくださいよ」

と言った後、住田主任医師はAKA療法を始めた。

